

韓国伝統村落における儒教と社会組織

Confucianism and Social Structure in a Traditional Korean Village

李 海濬

【論文要旨】

本稿は、支配理念としての儒教が、朝鮮時代の社会にどのように定着し、そして儒教によって親族制度や村落制度がどのように変容したのかを考察するものである。

政治理念としての儒教は、すでに三国時代から統一新羅、そして高麗時代にかけて一定の影響をすでに及ぼしていた。けれども、儒教が絶対的な影響力を発し始めたのは、朝鮮王朝時代からである。朝鮮時代は士族が支配階層として形成されていった時代であり、士族が普遍的理念として抱いていた儒教が重要視され、社会に影響を与えていくようになった。高麗末期以来、郷村社会は仏教的な思想基盤の上に成り立っていた郷吏勢力によって掌握されていた。士族は仏教を思想基盤とする郷吏勢力を抑えこむ絶好の名分として儒教を用いたのである。

儒教は長い時間をかけて社会に定着し、親族制度を変容させていった。朝鮮時代前期における親族制度は父方と母方の親族を並列して扱う「両系親族=非父系親族体系」の制度だった。けれども、17世紀中期を分岐点にして、性理学の普及により朝鮮時代後半は嫡長子中心の家父長的な親族制度へと移り変わっていった。族譜の記載は男系を詳述し、女系を簡略化して記録するようになった。また財産分与も長子優遇へと移り変わり、祭祀の相続も18世紀初期には長子奉祀に定まるようになる。

また、儒教は村落社会のあり方も大きく変えた。それまでは、40~50戸程度が1つの単位として自然村落を形成し、共同労役や村の雜役、シャーマニズム的な伝統が残る祭事、そして冠婚葬祭を相互扶助により執り行っていた。しかし、このような相互扶助的な共同体としての自然村落のあり方は士族が儒教的・性理学的な支配するようになると否定的に捉えられるようになった。そして村落は士族による重層的な支配体制の中で下部構造に組み込まれていったのである。